

# 歩行補助具は歩き続けるための味方

病氣や、加齢に伴う筋力の低下は、歩くことを困難にさせてしまう場合があります。そんなとき、強い味方になるのが、つえや歩行器など

全国福祉用具専門相談員協会



(写真は本人提供)

岩元 文雄 理事長

## つえ、歩行器、歩行車に大別

歩くことが難しくなった人が歩けるようになること、QOL（生活の質）が大きく向上します。人間は、外出時はおもろん、家の中でも、部屋の中を移動したり、玄関で靴を脱いだり、ちょっとしたつかまり立ちの折も、脚の筋肉を使い、歩いているからです。歩行補助具は歩くことが難しい人のQOLを大きく高める道具の一つなのです。歩行補助員は大別すると「つえ」と「歩行器」「歩行車」の三つになります。

「つえ」は、歩行補助つえともいい、T字の形をした一本の脚と一つの握りからなるT字つえ、松の葉のような形をした松葉つえ、接地点が枝分かれしている多脚つえ、前腕と握り手で体を支える「ロフトストランド・クラッチ」というつえなどがあります。

また、歩行器に似た「歩行器型つえ」もあります。歩行器は、体を囲む4脚の



左からT字つえ、ロフトストランド・クラッチ、松葉つえ、多脚つえ、歩行器型つえ

の「歩行補助具」。歩行補助具の種類や使い方などについて、一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会の岩元文雄理事長に聞きました。

フレームを持つ歩行補助具です。両手で歩行器を持ち上げ、前方に運んで進む固定式のもの、左右の脚を交互に前に振り出しながら進む交互式があります。

さらに、二輪、三輪、四輪と歩行器に車輪が付いた歩行車もあります。これほど多くの種類に分かれているのが歩行補助具なのです。それは、歩行補助具を必要としている人の体の状態や、使用する環境がさまざまで、体に合った、つえの長さや歩行器の高さを選ぶ必要があるからなの



上段左から二輪歩行器、交互式歩行器、二輪歩行車、下段左から三輪歩行器、四輪歩行車

## 生活が前向き、快活になる

中には、歩行補助具などの福祉用具を利用することをためらう人もいます。

その要因の一つは、本人が「歩けなくなった自分をまだ受け入れられないケース。これは期間の長短はあっても、誰にでも見られることです。そんなときは専門相談員

が、利用者本人が「自分の弱い部分」を話せるようになるまで信頼関係を築き、やりたいことを伺います。

トイレに1人で行く、台所で料理をする、孫と遊びたいなど、本人の願いを表現するために適切な福祉用具の利用を勧めると受け入れやすくなると感じています。ある1人暮らしの女性は、

です。また、歩行車は操作に慣れる必要もあります。下肢の緊張が高まる人の場合は、使用の前後に体のストレッチを行うとよいでしょう。

## 利用者ニーズに 適した選定を

私たち全国福祉用具専門相談員協会は、福祉用具専門相談員（以下、専門相談員）の専門性向上と社会的地位の確保を目指した職能団体として、2007年に設立されました。2000年にスタートした介護保険では、福祉用具に関わる業務を担う職種として、福祉用具のレンタルや販売を行う事業所ごとに専門相談員を2人以上配置することが義務付けられています。専門相談員は、福祉用具の利用者が自立した生活を目指すように「福祉用具サービスタ計画書」を作成します。

具体的には、利用者本人や家族から、生活の中で困っていることや、1人で歩きたい、外出したいなど、実現させたい生活の内容を聞き、利用者に適した歩行補助具などの選定した福祉用具の機種や、その理由を計画書に記します。

歩行補助具一つを取ってみても、歩行車の車輪の大きさが小さいものは室内で使えますが、屋外では凹凸にはまり

込んでしまい、かえってけがを誘発させる危険があります。ある程度の凹凸なら車輪が大きい歩行車がよいでしょう。



これらの歩行補助具を使って生活を充実させるのは利用者本人です。周囲が介護しやすくないという観点だけで選ばないことが大切です。

専門相談員を介して歩行補助具などの福祉用具を選定した場合、利用者の状況を確認するために、専門相談員が定期訪問を行います。例えば、体に合わないまま使い続けると状態が悪化してしまう恐れがあるからです。

福祉用具はレンタルや購入を行えば、それで終わりではありません。定期的に利用状況を確認しながら、利用者の気持ちに寄り添い、適した歩行補助具などの福祉用具を提案するのが専門相談員の役割だと思っています。

て行えるようになりました。家の中の移動はトレイ付きの歩行車を使うことで、食事の皿や茶碗を運ぶのに転倒やつまづきを防ぎながら行えるようになりました。

令和元年版の高齢社会白書によると、全人口に占める65歳以上の高齢者の割合は28.1%となり、要支援・要介護を認定された人も600万人を超えています。それに伴い、歩行補助具の利用は年々増えていきます。

今や歩行補助具などの福祉用具は、それに「頼る」ものではなく、積極的に「使えるものを使う」ものによって、快活に前向きな生活できると毎日のが充実します。高齢を「幸福」とするために歩行補助具はその要素の一つになっています。